

事業説明会（技術革新統括本部）

Q1 開発自動化はコスト削減に寄与しているという解釈で正しいか。適用が更に進むことで開発コスト削減の余地はあるか。

A1 コストに関しては、プロジェクトによってかなり変わるため一概には言えないが、会社全体では貢献していると考えている。コスト削減は重要な要素だが、開発自動化の一番の目的ではない。お客様からは短期間の開発、品質向上に対する要望が非常に強いので、それらを確実に実現する技術として進めており、実際、結果につながっている。

Q2 アジャイルでの開発ニーズが強いため、開発自動化により顧客ニーズを満たすという理解で正しいか。

A2 開発自動化はウォーターフォール系を対象とした取組みであり、アジャイルはあまり関係していない。

Q3 クラウド開発環境について、どのような段階にあるか。御社の開発フレームは、他社と何が違うか。

A3 オンプレミスで個別プロジェクト毎に開発環境を用意するというのは、既に別の会社でも見直しており、クラウド上で行う方向にシフトしている。当社がとりわけ早い訳ではなく、他社も同じ流れである。

開発環境は基本的には世の中で使われている共通のものを使っており、他社と差別化しているという訳ではない。今まで M&A をした会社はそれぞれ色々な開発ノウハウや、開発環境に関する知識の積み重ねを持っているので、それをグループ内で集約、最適化し、NTT データグループの中で共通的なプラットフォームを使おうとしている。それが特徴だと思う。

Q4 開発自動化は、不採算案件に繋がるリスクはないか。

A4 基本的に開発自動化と不採算はリンクしているものではない。不採算化するのには、上流における要件定義が十分ではなかったなど色々な理由があるが、開発自動化自体が不採算化に繋がるというものではない。

Q5 統合開発クラウドについては、2017 年 4 月頃から本格的に国内でも適用されていると思うが、いつ頃から利益率の改善に繋がるのか。

A5 先ほどの開発自動化同様、プロジェクト毎に開発の難易度やコストが違うため、一概にお答えすることはできない。今年度はまだトライアル段階だが、プロジェクト数としては相当数増えている。来年度は今年度の倍程度、再来年度は更にその倍程度という勢いで増えていくので、来年度くらいから一定のコストメリットが出てくるのではと考えている。

Q6 IoT や AI 等、幾つか成長領域を挙げていたが、最初の段階では一定の研究開発投資が必要なのではないか。重点領域の中で特に開発費がかかる領域はどこか。また、来年度、再来年度以降も投資額は増額となる見通しか。

A6 AI については、当社はコアの AI エンジンを作っている訳ではないので、その面での多額の研究開発投資はしない。ただ、NTT の研究所の技術も含め、世の中にある技術を活用するという面にはかなり力を入れており、特に AI に注力している。AI やブロックチェーン等の注力領域については投資を増やしていきたい。投資の絶対額は、来季以降も増加する見込みである。